

無想録 二十 十八願のこころ

大無量寿経は、十八願のこころを説かれた真実中の真実教である。久遠の真実が、釈尊を通して名告っている経である。

如来は人間のはからいを待たずとも、いつでもどこでも名告っていられる。正覚の大音は一切群生の上に響流している。

念仏とはこの名告るみ仏のこころを聞くことである。この如来の招喚のみこころを聞くところが真実の大信である。

お名号の招喚を聞くところに少しの不純な雑り心があっても、十八願のこころは失われる。南無阿弥陀仏の不行を受け取るこころは、本願真実のこころ、すなわち如来の大信心である。

仏を念ずるものは仏心である。大無量寿経は、仏仏相念の経であった。

如来を念ずる心に如来の本願があり、念ぜられる彼岸の仏が南無阿弥陀仏のお名号である。

「彼の岸に招びます名号はそのままだに

地に我生かす本願なりけり。」

本願は、至心、信樂、欲生のみ心である。法蔵菩薩の聖なるみ心である。

そして信樂はそのまま衆生の大信心である。衆生に廻向したもう如来心である。

信心をもつて如来の本願に救われようとする心、その心が如来を裏切る自力のこころである。

如来の本願こそ、至心、信樂の信心にてましますのだ。

信心をおこして、南無阿弥陀仏を頂こうとする心、南無阿弥陀仏を二十願の真門にしてしまうのである。南無阿弥陀仏すなわち信心である。

聖人は「大信海」と言われる。信心は、如来の広大なるみこころなるがゆえに海にもたとうべき、底なきこころである。

南無阿弥陀仏に生きるとは、この広大なるみこころに生きることである。

お念仏は大善であり、至徳であり、聖人のいわゆる「真如一実の功德宝海」である。善として備わらざるなく、徳として内具しないものはない。

であるからとて、大善至徳なるがゆえに、これに執着すれば、十八願のこころは失われる。

ただお名号の招喚に生くべきである。

一遍上人が由良の法灯国師の所に行かれて、

「唱うれば、我も仏もなかりけり、南無阿弥陀仏の声のみぞして」

と一首出されると、法灯国師はまだ「声のみぞして」と声が残っていて不徹底だと言われた。そこで工夫に工夫を重ねて、「唱うれば我も仏もなかりけり、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と出されると、国師は初めてほめられた。

能所一如、称える衆生と、称えられる仏と、そこに微塵の隔りもゆるされぬ。能念、所念、ただ南無阿弥陀仏一体の中に没入して、仏我一体の境。

「親しといふも猶おろかなり、近しといふも猶遠し。(南無阿弥陀仏) 一体のうちにおいて、能念ねんじて 所念ねんじられてを一体のうちに論ずるなりと知るべし。」(『安心決定鈔』)

春は花の上において春を成就し、

如来は衆生の上において功德を成就する。令諸衆生功德成就とは、本願の御はからいである。

功德は、衆生の善悪を除いて成就されるのではなくして、善悪をそのまま功德に転ずることによって、功德を成就するのである。

2

悪を廃やめて善を修し得るといふ自惚うぬぼれのある世界には真の念仏はない。

廃悪修善の世界の極致は、久遠の業障に目覚めて、如来自然の浄化聖化の本願力の生きますところに開ける。

如来智慧光による大否定、全否定によって、人間の一切善悪が生かされるのである。悪を転じて徳と成す。転悪成徳だけが十八願の世界、いな、大乘の至極、一仏乗である。一切衆生悉く度わたさるべき弘誓である。

古往今来、生物の死骸や、糞尿がどれだけでできたか知れない。それが土になって一つも残っていない。科学者が、バクテリアの作用だ、風化作用だと説明しても、人間の理知以前に天地に実在する妙用にほかならない。

善人も悪人も、褒める者も貶けなす者も、殺す者も生かす者も、賢も愚も、敵も味方も、善悪、賢愚、愛憎、等々の一切を超えた、深いところで一つに生かされる世界、それが十八願のころである。

腹を立てるなど言われても時によれば癩しやくにさわるし、欲をおこすなど言いつて聞かせても、欲ばかりであるし、愚痴もおこれば何でもおこる。

だが、悪口言われたと聞いてもおこりきれないし、悪にくんでみても悪みきれないし、おかしい心が念仏している私の心である。

「雲のかかるは月のため。風の散らすは花のため。」

歌の文句ではないが、それぞれが尊い役目をはたしているらしい。ただ人間は、勝手のいい時、善の名をつけ、勝手の悪い時、悪の名をつける。善悪を超えなければ善が見えないし、美醜を超えなければ美が見えない。十八願のころは、善悪を超えて善を、淨穢を超えて淨を、賢愚を超えて、如来の智慧に生きる世界である。

眼先き一寸ほど見えて、善悪をつけると、十日たたぬ間に悔いが来る。眼先き一尺ほどを捕えて、価値を定めると、不用なものが沢山ある。

嘉永六年、黒船をつれてペルリが浦賀に来た時は、幕府の役人はあわてたことである。今日から見ればそれが何であつたかがはつきりする。

如来の智慧は、久遠から永遠への長い眼で今日のいかなるものでも生かされることを告げられるのである。

如来の本願に生ききつて「善悪のこと総じてもて存知せざるなり」と仰せられた聖人のみ心を拝まずにはいられぬ。

本願の心は柔らかな心である。だが弱い心ではない。

凡夫の心は、堅くて弱いところである。

いかに強いようでも、压制や、反逆の心は、真に強い心ではない。

いかに弱く見えても、真の忍従や、合掌は、一番強い相である。

仏心より流れ出る、智慧と慈悲の行者でなくては、忍従も合掌も生きてはこないからである。

光明団の思想が古いと言った人があるそうだ。まことにそうであろう。

ただ、十八願のころに生きることよりほかに道のない私には、どうも仕方のないことである。

十八願のころは、大聖の大寂定より名告り出で、億々の凡聖の魂と生活の中で、思惟し、選択し、願生してきた、永遠の生命の流れである。

ただその純粹なる生命の流れである。

生まれた者の中に、生まれたことのないものが生き、

死ぬる者の中に死ぬることのない者がささやく。

生まれた者が、生まれた者であることに徹し、死ぬる者が死ぬる者になりきる時、生まれもせず、死にもしないものが、われになりきりたもうことがわかる。

諸行無常になりきることが、そのまま常住なるものに生きることである。

十八願のころである。

現世を祈る心は、人間の心である。無智と、幸福を求める人間の当然のころである。

いかに禍に満ちても、現世を祈らないで、そして自暴自棄に陥らないで、最後まで、ありのままを抱きしめ、背負いきって歩みつづける人の足跡には、人類をうるおす尊い血が流れている。

「あれを見よ深山みやまの奥に花ぞ咲く、真心つくせ、人知らずとも」

人も見に来ぬ山奥に咲く桜、その花の心を知るや。黙々の努力の人。花咲かずして、賞讃を求め、生ききらずして憤る。

何ゆえにわが心と語らざるか。

わが心、わが心を信じ、われ、われと語る者、やがて仏と語る。

十八願の心にはゆとりがある。

庭の桜の木に、花を咲かせてくれることよりほかに謝礼は求めぬ。

十八願の世界では、念仏の華に生きることのそのままが報謝である。

自分一人が真実に生きている気で、高い所から見下すことが人間の我慢である。

十八願のころは、南無阿弥陀仏を通して全てを見る低い合掌の心である。自分の中にこそ一切の悪の相を見とどける世界である。

宗教は宗教によつてのみ否定される。

十八願の宗教は、無宗教の宗教である。

美しい象牙の塔を、傲慢界と言ひ、胎宮と呼ばれる。

女人禁制の山からおりて、世の中に隠遁された時、聖人は仏に会われたのである。

真実の仏は、温かい静かな聖者の住む山の頂にはましまさずして、煩惱の風の吹き荒ぶ、苦悩の衆生の広野にこそいたもうたのである。

北越の雪の中にこそ、愚禿を待ちたもう法蔵菩薩がましましたのではなかつたか。

人間の声が、宗教を讃美したり、否定したりする。

一番宗教を擁護し讃美するかに見える大本山、大伽藍の中には仏はましまさないと、宗教を否定するかに見える人間の世界に、仏は今も名告りたもうてあるかも知れない。

十八願の宗教は、法蔵菩薩のみこころである。

法蔵菩薩は、風荒き人間の広野に生きたもうのではあるまいか。

十八願の宗教は、荒野の宗教である。

法蔵菩薩の本願によつて成就された三蔵の浄土は、法界実相の象徴相ではあるまいか。十方衆生ことごとく浄土の大衆でなくてはならない。彼岸には、東西本願寺、木辺派、仏光寺派の差別はなく、真言、浄土、禅によつての差別はない。念仏の衆生は撰取によつて同一である。

ある寺に和尚をつれて講演に行くと、宗派が違うから、和尚だけは語らしてくれないなどのことである。いつか木辺派の孝慈上人を迎えた本派の寺が、大変なお叱りを受けたからとのことである。無理もないことである。在家を借りてそこへ移った。孝慈師と、本派の御連枝とはご兄弟である。宗派の規則が、地上の兄弟の友愛、孝道すら裏切るではないか。まして彼岸の招喚は無視されているではないか。最後というところで十八願のころは失われる。

仏教は思弁哲学ではない。大般若六百巻も、実践をはなれては単なる戯論げろんである。戯論は墮落であつて仏法ではない。

またしても如来の招喚の声が聞こえる。如来まします人間の広野に帰ろうではないか。

十八願のころは一切を超えた広いころである。